



TITLE:

バロックの建築論的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

渡部, 貞清

CITATION:

渡部, 貞清. バロックの建築論的研究. 京都大学, 1968, 工学博士

ISSUE DATE:

1968-05-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212868>

RIGHT:

氏 名	渡 部 貞 清
	わた なべ さだ きよ
学 位 の 種 類	工 学 博 士
学 位 記 番 号	論 工 博 第 209 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	バロックの建築論的研究

論文調査委員 (主 査) 教授 増田 友也 教授 川 上 貢 教授 福山 敏男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、バロック建築の空間的諸現象を、その先行現象であるルネサンスおよびマニエリスムのそれと対比のもとに考察し、そこにみられる象徴的空間を理論的に分析することによって、バロックの建築的特性を明らかにしようとするものである。本論の構成は3部、20章と序論および結語からなる。

第Ⅰ部でバロック建築の先行的建築を詳述し、第Ⅱ部ではバロック建築の空間的現象の様態を追求、記述しているが、さらに2篇に分けて、ロオマ・バロック建築の成立、およびその流布ならびに影響をそれぞれの篇で記述する。そして第Ⅲ部で第Ⅰ部および第Ⅱ部の空間的諸現象を対象として、バロック建築を象徴的空間と見る立場からそれらを考察し、その結論を導いている。

まずバロック建築の先行現象としてのルネサンス建築を記述するにあたって、従来のブルクハルト的ルネサンス観のもつ欠陥が指摘されはじていることに注目している。即ちルネサンスは多様な流れであり、従来の諸論のように、古典古代の再生と見て、中世との不連続説を取る立場からのみでは、その本質を理解することはできない、ブルネレスキのサンタ・マリア・デル・フィオレのクボラは、中世の精神にもとづくモニュメントであり、やがて、ミケランジェロのサン・ピエトロのクボラをへてバロック建築に継承されるもので、中世の根は、ルネサンスを通じて意外に深いといわなければならない、とする。

ルネサンスの正嫡はバロックであるが、その間にいかなる理由でマニエリスムが発生し、それがどのようにしてルネサンスを終熄させ、また、バロックの成立に影響を与えたかは、バロックを考察するにあたって極めて重要な問題であることは言うまでもない。しかも古典様式の危険は硬化であり、マニエリスムの危険は解体である。バロックは、このマニエリスムという古典様式に対する抵抗現象を克服し、はじめて、緊張ある表現をかちえたといえることができる。

つぎに、ローマ・バロックの成立をみるにあたって、教皇庁のあるローマという都市の特殊性を取りあげ、そこには、外部からの影響をうけずに、きわめて自律的な、連続的な様式変遷の流れが認められることを指摘している。そこで、イル・ジョズ寺院における中世からの発展過程をたどり、時代精神と様式発

展の変化の必然性を追求し、また、バロックの背景をなす諸現象を、さまざまな社会的観点から考察している。これらはバロック建築の発生に対してその基盤をなすものであり、それはまた、とりまなおさず流布に関する機構をなすものである。この点に立って、ローマ・バロック建築の成立について、主として、G.L. ベルニニとF. ボルロミニとにしぼって、それらの建築的特性を記述しているが、それは、ベルニニをバロックの完成者とし、ボルロミニをその頂点を極めたものとして理解するからである、と言う。ベルニニの建築は、対比法 (Contrapposti) という対極的原理をもつものであるが、それはマニエリスムの逆説的姿勢や、ルネサンスの分節的調和とは本源的に異なる精神であるとする。

イタリア国内で、もっともローマ・バロックの影響が顕著なのは、トリノを中心とするピエモンテ地方の建築であるが、ボルロミニの影響をガリニに、ベルニニの流れをジュバラに見、さらに両者を総合し、かつフランスのロココに血脈を引くものとして、ヴィトネに注目している。またヴェネツィアは祝祭的な雰囲気を通してバロック建築に貢献し、例えばレッツェの作品は愛らしい挿話をヨーロッパ17世紀にもたらしたと言う。

フランスは、イタリア・バロックの大きな影響を受けながら、あくまでも古典主義の国であり、いうならばバロック的彩りをもった古典主義と規定することができよう。即ちフランスにおいても、ヨーロッパのその他の国と同じように、反古典主義的な現象として、華麗な祝祭装飾がみられ、それらは王侯、貴族から農民社会にいたるまで広く流布していることを指摘している。

オーストリア、ボヘミア、南ドイツを中心とする中央ヨーロッパ諸国は、ローマ・バロックの影響がもっとも強くみられるが、その背景をなすものとして、オーストリア帝国の権力の象徴としての要求と、戦争によって衰微した農民たちの本来的な感覚的風土について述べている。

スペインにはもともと中世からの伝統をうけついでプラテレスコ様式が、第15、6世紀にあたった。そしてきわめて官能的な風土性を持ち、バロック的性格の強い地域であるということが出来る。それ故に、スペインにはヨーロッパ・バロックにひとつの特異な相貌を与えるチュリンゲラ様式が第18世紀に成立したが、しかしそれはイタリア・バロックの本質を理解したものとはいえず、それに対して抵抗的であり、むしろスペイン個有の装飾性を強くもつものであったと言う。

さて、本論の主題を、バロックの建築論的研究と名づけ、現象論的立場から、バロックの建築的空間の考察を進めている。

即ち、現象的空間ならびにその空間概念の意義を論じ、ついでこの立場からのバロックの理解が、もっともラディカルな方法であることを論じている。空間が建築を理解するもっとも基底的な事柄ではあるが、単なる空間的様態だけでバロックを理解するのに限界があろうとし、現象的空間の一樣態であるところの、情緒に彩られた象徴的空間をとりあげるのである。このようにして、バロックの象徴的空間における象徴形式を、つぎのように抽出し、それぞれについて論証を行ない、それを結論としている。即ち、

①外部の象徴、②求心形平面の方向化③＜聖なる空間＞と＜地上の神の空間＞との混在、④不明晰な空間の象徴、⑤装飾における構築性⑥相貌的認知における象徴性、⑦対比法、⑧力動的な仮象。

ところで、バロックは人間感情の生命的な根源からの創造であるから、形象化した結果としての形づけ (Figuration) が、かならずしも一定の様式をもつとは限らない。それは前一形づけ (Präfigural) の過

程を顕著にもつものであるといえよう。したがって、バロックは従来の意味における明瞭な様式という見地から理解すべきものではなくて、その前一形づけの段階における一定の姿勢をこそ了解すべき様式であると結論し、特に心理学的アプローチを重視している。

論文審査の結果の要旨

第19世紀中葉以後、バロック建築に関する各種の研究が、多くの研究者によって、繰返し行なわれて来たのには、二つの大きな理由が考えられる。その一つは、第15世紀前半から、第17世紀後半に至るやく2世紀半に於けるルネッサンス——マニエリスム——バロックの建築的系譜の内に、いわゆるヨーロッパ建築なるものの確立、もしくはより一般的には、建築観念の定着、が見られ、なканずく、ルネッサンス建築の主知的法則性から、バロック建築の主情的幻想性への推移の過程に、建築に於ける本質的な諸問題が、殊どすべて露出して来るからである。この両極的現象を諸学者は、或は相補的であると見、或はルネッサンス身振り、もしくは形づけに対するバロックの原身振り (Urgebärde)、もしくは前一形づけ (Präfiguration) と呼ぶのも、言わば、前者は空間的に、後者は時間的にその対比を行なっているのである。

第二の理由もまたこの事にかかわる。例えば、G. R. ホッケの最近 (1959年) の研究に於いて、ヨーロッパ芸術史に5期のマニエリスム期を認め、その最後期を1880—1950年においていることから明らかな様に、現代芸術もしくは現代建築にマニエリスム、或はバロック的諸現象を見ることは、次第に通説化しつつある、と言ってよい。従って今日の関心から、これらの建築を分析し、精査しなおすことが必要になってくるからである。

著者の研究は、主として、この第二の立場に立つものであって、その分析的研究において、建築学は勿論のこと、一般史学、考古学、美学および心理学などの関係各領域の諸研究の成果を広く導入して、そこから著者独自の論証を展開して頗る説得的である。著者は、本論の第Ⅰ、第Ⅱ部において、それぞれバロック建築の先行現象およびバロック建築の諸現象を時間的にも空間的にも巾広い豊富な引証によって、詳述し、前者にあつては、マニエリスムの建築的原理について、H. ヴェルフリン、M. ドヴォルシャク、A. リーグル等を初めとし、N. ペウスナア、R. ヴィットカウア等を随所に引用しながら、その反古典的の原身振り、プラトンのイデア説、神秘的な自然の魔法 (Magia, Naturalis)、綺想異風体 (Concettismo)、危機感、両義性などの、殆んど今日の原理に即して述べ、さらにその表現的手法に関しては、夢幻的な浮遊、蛇状曲線 (Figura Serpentinata)、バラドキシカルな対比、特殊な錯覚的パースペクティブ、神観的人間観、円形の歪みとしての楕円、隠喩法を、その主標徴とする。これらの指摘は、ルネッサンス建築と、そのアンティ・テゼとしてのバロック建築との、仲介をなすものとしてのマニエリスムを正確に位置づけている、と言えよう。

またⅡ部のバロック建築に関しては、前述の諸先学の外に、B. クロオチエ、A. ムニヨッ、E. マル、E. ドル、及び主としてV. L. タピエなどの諸学説を整理しながら、バロック建築の発生の社会的基盤を、当時の宗教改革運動に対するカソリックの反対運動と、ならびにその儀式重視、ジェスイット派、もしくはヨーロッパの君主、貴族、領主、ブルジョワジーなどとの関係などに見、なканずく当時の農民的祝祭や、ヴェニスやパリその他の都市的祭式との関連において、シアトリカルなバロック建築の特質を明確にす

る。そうしてロオマン・バロック建築の成立過程で、G. デラ・ポルタの楕円形、C. マデルナの絵画性と動勢、および立面における中心部(aedicula)の構成による全体的統一、などを通じてその様式的成立を述べ、G. L. ベルニニのサン・ピエトロの天蓋(Baldacchino)の振り柱と浮上モチーフ、S. ビビアナからS. アンドレアに至る間での立面中心部の形式的確立、その造型原理としての動勢の対比法(Contrapposti)彫刻的空間における光の計量、建築外部の内部化、などによるバロック建築の様式的完成、そうしてF. ボルロミニの幻想的構造、波動曲面と変楕円形、彫塑的建築の空間化、交響楽的な空間リズム、外部における浮上の造型などによる様式的爛熟、さらにP. ダ・コルトナ作品内部の過装飾、などを経て、遂にローマを離れ、G. ガリニのドラマティックな官能性に至り、やがて全ヨーロッパ、なかんずくその教会や宮廷を席捲する、と言う歴史的事実を詳細に、批評的に記述し、第Ⅲ部における著者の建築論的研究の資料として準備する。

第Ⅲ部において、著者は独自の建築論の批評を展開している。即ち著者は、第二次大戦後に急激に進展した象徴理論、建築論における空間論、それから芸術論一般における深層心理学の適用などを駆使して、バロック建築の空間的現象を分析するのであるが、そのシステムの根拠を、H. ヴェルフリンのバロック様式の対古典様式の基礎概念であるところの、線的と絵画的、或は触図と視図、平面と深奥(空間)、閉じられた形式と開かれた形式、即ち構築的と非構築的、多様性と統一性、或は多様の統一と単純な統一、明晰性と不明晰性、に求めて、その空間的意味を以下の様に論証する。

先づファサードの象徴性については、G. ギディオン指摘する空間性を超えて、当時の自然観の幻想性に関連づけ、その空間化として、特にベルニニ、ボルロミニの立面中心部の波動化を解釈する。次にルネサンス建築における古典的な求心の平面の、バロック建築の中世的なラテン十字平面への復帰、或は楕円形クボラなどによる長軸化、などを非中心化と見、次いで、そこに天上と地上との両義性の象徴を読むべきだとする。これらの両義性と、ヴェルフリンの指摘する不明晰とが相即して、空間を不分節化し、そこで統一的に全体化して、S. ランガアの主張するような雰囲気的空間を現象する、と説く。同じ有機的な全体性は、建築全体の構築性にもかかわらず、壁面での一見非構築的な一体性に、即ちその彫塑性において一層強調され、そこに力動的な、或は相貌的な知覚現象を惹き起していることを明らかにし、バロック建築のいわゆる権力的表現の造型的根拠を見出している。次いで、ベルニニの対比法が、単に空間的併列関係の対比にとどまらず、因果律的もしくは時間的対比にもおよぶことを述べ、続いて、R. アルンハイムやA. エレンツァイグの深層心理学的芸術論を紹介しつつ、ヴェルフリンの言う空間の深奥性なるものの秘法を明らかにし、最後に、幻想による非合理、浮上による反重力にもっとも有機的、心理的な意味における、バロック的空間の特異性を見るとする。

要するにこれらの論証は、バロック建築の今日性に著目しつつ、その建築的特性を分析して、そこに一つの建築論体系を提案しようとするものであって、単に歴史的考察にとどまらず、ややもすれば混沌に墜ち勝ちな現代建築の動向に、いまだ重要な示唆を与えるものと言えよう。よって本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認められる。